

『三四郎』と『ハイドリオタフィア』

河 村 民 部

東京大学の文科に入学した熊本出身で23歳の小川三四郎は、西洋文明の洗練を受けるべく大都会東京に向かいながらも、一方では形式的な儒教道徳、古い過去を引きずった青年である。後者の古い過去あるいは形式にとらわれた三四郎を見事に浮き彫りにしたのが、九州女の色の黒さへの安心感であり、また見知らぬ女との一夜の同衾のときの三四郎の「度胸」のなさであるとするれば、前者の西欧文明のほうは、彼が汽車の中で取り出して読むものまねをするだけのベーコン論文集に、西洋女性の色の白さに、そしてなによりも、狭い日本にとらわれては「あぶない」としきりに警告を発する、これまた偶然乗り合わせた40くらいの男、広田先生に象徴されている。

三四郎には周知のように、大学に入学してから、三つの世界が出来る。つまり三四郎があとにしてきた母や三輪田のお光さんのいる熊本の過去の世界、これとは対照的にいま三四郎が直面している二つの世界、つまり理学士の野々宮宗八君や広田先生の住む現実から隔離された学問の世界と里見美禰子や野々宮よし子のいる社交の世界である。そして、この三つの世界をどのように一つにまとめて生きればよいのかを試行錯誤する純粋な青年の青春を描いたのがこの小説である。

「とらわれちゃだめだ」といわれたにもかかわらず、この三つの世界の内で、三四郎が虜になるのは、やはり、女である。野々宮宗八君のような陽のささない穴蔵の実験室に閉じ籠るには、三四郎の「青春の血」は「あまりに暖かすぎる」。だが一方に過去の古い道徳を引きずっているから、素直に己の感情表現が出来ないで、読者を微笑ませると同時に苛立たせることしきりである。ウブだといってしまうばそれまでであるが、これまで男と女を区別

して育てられてきた過去を持つ青年にしてみれば、これは単に個人のレベルでの「ウブ」だとか「奥手」だとかの問題ではないのである。

さて、「目の前には眉を焦がすほどの大きな火が燃えている」三四郎に、広田先生が貸してくれるのが、サー・トーマス・ブラウンの『ハイドリオタフィア』（漱石はハイドリオタフヒアと綴っているが、以下ハイドリオタフィアを用いる）という本である。三四郎は上京の汽車の中でも持参したベーコン論文集、図書館で見つけるアフラ・ベーン、野々宮君が言及するラスキン、よし子のいうドーデの『サッフォー』、佐々木与次郎の挙げるイブセンなど西洋の書物に振り回される中で、ひときわ訳の分からぬ書物に出くわす。それが『ハイドリオタフィア』である。

この本の『三四郎』における意義については、私の知るかぎりでは、川崎寿彦氏がその「メメント・モリ」としての役割りに言及したのが最も早いのではないと思う。つまり青春のいのちの真只中にあっても、死を忘れるなという意味である。そして同じく川崎氏は「あぶない」と警告を発する広田先生が、このメメント・モリを具現した人でもある点をも同書の中で指摘している。⁽¹⁾ したがって、三四郎自ら後にいうように、広田先生その人がハイドリオタフィアなのである。

この川崎氏の指摘は間違っていない。むしろ『ハイドリオタフィア』の『三四郎』における役割りを簡潔に要約しているといってよい。だがただそれだけではない。我々はもう少し詳細に小説の中でこの本がどういった場面に引用されたり、言及されているのかを確かめなければならない。

そもそもハイドリオタフィアとはどういう意味なのか。そしてこの本はいったい何について書いた本なのかを、まず知らねばならない。

Hydriotaphia

To my worthy and honoured friend

Thomas Le Gros of Crostwick, Esquire

著者 Sir Thomas Browne (1605-82) の患者であり友人であった同郷の郷士へのこのような献辞で始まる本書は、正式の書名を *Hydriotaphia Urn-Burial, or A Brief Discourse of the Sepulchral Urns lately found in Norfolk* (1658) とする。

我が国では、漱石が『三四郎』の中にその一部を引用して以来その名が知られるようになったが、本書の詳しい内容に至っては、未だに十分な研究がなされている様子はない。ましてや本書の内容と漱石の引用箇所との比較研究、およびなぜ漱石がこれを引用したのかについての本格的な研究においておや。これはいったいどうしたことであろうか。

何故この本が読まれないで来たのかというと、一つにはそれが難解深遠をもって知られる、しかも17世紀半ばの書物だからという評判のためであろうし、その扱っている内容が死者の埋葬に関するもので、あまり嬉しい楽しい明るい話ではないからでもであろう。これらは概ね『三四郎』の註によって助長されたと言ってさしつかえないであろう。

『三四郎』の註は全集、文庫本を問わず、どれもこれも皆一様に、Urn Burial or Hydriotaphia と or の前後が逆転した誤った記述が不用意にも踏襲されている。註釈者が如何に腕をこまぬいて、原作にあたらないでいるかを例証するものである。

Hydriotaphia というギリシャ語の語源を持つといわれる単語は、これだけでは英語を母国語とするものにとっても分からないだろうというので、正式には「つまり」を意味する or をつけないですぐに Urn-Burial (「壺葬論」) と続けているのであり、しかもその内容を示すべく、これに続けて「つまり」の or を用い、「ノーフォーク州にて近頃発見されし骨壺に関する短き論述」という副題を付けているのである。

そして本書が読まれないもう一つの理由は、おそらく三四郎自身が小説の中で本書に関してこのように述べていることにも拠るのであろう。

広田先生から聞くところによると、この著者は有名な名文家で、この一編は名文家の書いたうちの名文であるそうだ。広田先生はその話をした時に、笑いながら、もっともこれは私の説じゃないよと断わられた。なるほど三四郎にもどこが名文だかよくわからない。ただ句切りが悪くって、字づかいが異様で、言葉の運びが重苦しくって、まるで古いお寺を見るような心持ちがただけである。この一節（『ハイドリオタフィア』の末節のこと）だけ読むにも道程にすると三、四町もかかった。しかもはっきりとはしない。(十)⁽²⁾

そして三四郎のこの感想はあながち当を得ていないわけではない。確かに「句切りが悪」いし、「字づかいが異様」だし、「言葉の運びが重苦し」といった点は17世紀半ばの英語の文体にも拠るのである。しかもその内容が葬儀にまつわることとあってみれば、まさに「まるで古いお寺を見るような心持ち」がしても不思議はない。

『三四郎』における引用部分あるいは言及部分に具体的にはいる前に、少し本書の内容説明をしておくほうが親切であろう。

「畏友クロストウィックのトマス・ル・グロス卿へ」という献辞の中で著者ブラウンは、せっかく発見された骨壺をそのままにして再び死に至らしめ、われらの中に再び埋葬し去るのは耐え難きことなれば、人の生死を扱う医者である自分が、生者を保護し、死者を蘇らせ、骨壺の中より死者を取りだしてその残れるもの（骨）について語るは不心得ではないであろうからと、この論述の由来を説き、古代の遺物の収集者であり、すぐれた骨壺をいくつも見て来た、過去に大変関心と理解のあるグロス卿に本書を捧げることの正当性を説く。

またこの献辞の中で著者はこのようにも己の論述の必要性を述べている。

起こりし様々なることどもを観察し、顕著なることは一つたりとも見逃

さぬことこそ時宜を得たることなり。祖先の怠惰崇りて、今に残れるもの少なく、はたまた無情の時によりて、記録が潰えしかば、如何に学者が知恵を絞らんとも、いま一つの新しきブリタニアを建立するは容易ならざることなればなり。

いまや古えを省みて、我らが祖先に思いをはする好機なり。偉大なるもの日々その数を減じ、過ぎにし世から実例を仰ぐばかりの昨今なれば。素朴なる美德飛び去りて、曲がりたること大手を振りてまかり通るご時世なれば。我らは過去現在を頼りに己を確立すべくなすべきこと多し、しかも事態を広く掌握したとて我らが悟りの役に立つことすくなし。完璧なる一つの美德の成るに古えよりの時の集積を要するは、あだかも類い稀なる美女ヘレン一人を描くにギリシャの美女のすべてを要したるが如し。

('Tis time to observe occurrences, and let nothing remarkable escape us; the supinity of elder days hath left so much in silence, or time hath so martyred the records, that the most industrious heads do find no easy work to erect a new Britannia.

'Tis opportune to look back upon old times, and contemplate our fore-fathers. Great examples grow thin, and to be fetched from the past world. Simplicity flies away, and iniquity comes at long strides upon us. We have enough to do to make up ourselves from present and past times, and the whole stage of things scarce serveth for our instruction. A complete piece of virtue must be made up from the centos of all ages, as all the beauties of Greece could make but one handsome Venus.)⁽³⁾

本書は上記引用の最後の一文「完璧なる一つの美德の成るに古えよりの時の集積を要するは、あだかも類い稀なる美女ヘレン一人を描くにギリシャの美女のすべてを要したるが如し」にいうように、死あるいは葬儀に関する古

今東西の様々な実例、フィクションを、数多くの偉大な書物から取り来たって、人間の生と死と死後に関するあらゆる思想を埋葬した、まさに知識の「壺」であるといっても過言ではない。三四郎がいうような、ただ「古いお寺」というようなものではなく、それはそれはおそろしく知的興味の尽きない本なのである。

ただしそうした知的なご馳走を味わうには、読者の方が大変である。さきほどの三四郎の文体に関する感想は無論のこと、本書を読むには聖書をはじめ、西洋の古典的名著に精通していることが望ましい。たとえば、プルタルコス（プルターク）『キモン』（*Cimon*）『ヌーマ』（*Numa*）『リュクールゴス伝』（*Lycurgus*）『フィロポエメン』（*Philopoemen*）『ティベリウス・グラックス』（*Tiberius Gracchus*）『ポンペイ』（*Pompey*）『小カトー』（*Cato Minor*）、キケロ『発明について』（*De Inventione*）『法律について』（*Laws*）、カムデン『ブリタニア』（*Britannia*, 1586）、ホラチウス『詩論』（*Ars Poetica*）、ホメロス『イリアッド』（*Iliad*）『オディッセイ』（*Odyssey*）、スターティウス『テーバイ遠征譚』（*Thebaid*）、プリニウス『博物誌』（*Natural History*）、オヴィディウス『転身物語』（*Metamorphoses*）『ファスティ』（*Fasti*）、タキトゥス『年代記』（*Annals*）『アグリコラ』（*Agricola*）『ゲルマーニカ』（*Germanica*）、スエートーニウス『ジュリアス・シーザー』（*Julius Caesar*）『ティベリウス』（*Tiberius*）『ネロ』（*Nero*）『ウェスパシアーヌス』（*Vespasian*）、シーザー『ガリア戦記』（*Gallic War*）、マクロビウス『サートゥルヌス祭り』（*Saturnalia*）『スキピオの夢、注解』（*In Somnium Scipionis*）、ミヌキウス・フェーリクス『オクターウィウス』（*Octavius*）、シドニウス・アポリナリス『書簡集』（*Letters*）、プロペルティウス『エレジー』（*Elegies*）、ヨセフス『骨董』（*Antiquities*）、サクソ・グランマティクス『デンマーク人の事跡』（*Historia Danica*）、オラウス・マグヌス『北方民族誌』（*History of the Goths*）、オラウス・ヴォルム『デンマーク人の記念物』（*Monumenta Danica*）、ホ

リンシェッド『年代記』(*Chronicles*)、エウリピデス『ヘキューバ』(*Iecuba*)、A. ボシオ『ローマの地下』(*Roma Sotterranea*, 1632)、J. B. カザリウス『都について』(*De Urbis*, 1650)、プラトン『国家』(*Republic*)『法律』(*Laws*)『パイドラス』(*Phaedorus*)『ゴルギアス』(*Gorgias*)『パイドーン』(*Phaedo*)、マルクス・テレンティウス・ウァロ『メニッポスの諷刺』(*Satyrae Menippeae*)、ディオゲネス・ラエルティウス『思想家の生涯』(*Lives of Philosophers*)、カッシオドールス『ヴァリアエ』(*Variae*)、J. B. マルリアヌス『ローマの地図』(*Romae Topographica*, 1544)、リセルス『解剖用小刀』(*Culter Anatomicus*, 1653)、ヒッポクラテース『カルニブスについて』(*De Carnibus*)、A. オルテリウス『世界の劇場』(*Theatrum Orbis Terrarum*, 1574)、クセノポーン『アナバシス』(*Anabasis*)、ダンテ『神曲』(*Divina Comedia*)、ポキュリデース『格言集』(*Gnomai*)、ルーキアーノス『ヘルモティムス』(*Hermotimus*)『黄泉路の旅』(*Downward Journey*)『神々の対話』(*Dialogues of the Gods*)、ウェルギリウス『アエネーアース』(*Aeneid*)、ホラティウス『オード』(*Odes*)、N. マキアヴェッリ『ディスコルシ』(*Discorssi*)、J. グルテルス『古代の銘』(*Inscriptiones Antiquae*, 1603)、G. カルダーノ『我が人生について』(*De Propria Vita*, 1614)、アリストテレーズ『天について』(*De Caelo*)、ルーカーヌス『ファルサリア』(*Pharsalia*) 等々枚挙にいとまない程である。まさにイギリスにおけるルネッサンスにふさわしい書物の山である。

さて、肝腎なのは本書の中身であるが、より詳しくはあとに付す『『ハイドリオタフィア』概略』を参照されたい。まず第一章では葬儀の種類、火葬、土葬、水葬などから説き起こして、古代人がそれぞれの思惑・迷信などから、人間本来の元素である火に帰るべく、浄火の意味も込めて、火葬を選んだものもあれば、復活を願って土葬やミイラにしたもの、あるいは人間本来のもう一つの元素である水に帰るべく水葬に付したものと説く。キリ

スト教が登場するにおよんで、肉体の復活を信じるものにより、火葬は廃止されて土葬へと移っていった様が語られる。

第二章では、最近出土したノーフォーク州の骨壺をめぐって、おそらくそれらがローマ人のものであったと思われること、およびローマの支配のもとでブリテン島に火葬の習慣が定着していったが、キリスト教が支配権を確立するにいたって、次第にその習慣は消滅していった旨を説く。

第三章では、埋葬の壺の一般的な円状の球形の形態および粘土・銅・銀・金・斑岩などの壺の種類、それを覆うレンガ・タイル・石あるいは土などの覆い、一緒に埋葬されたランプ、酒壺、涙壺、その他指輪、コイン、歯に使った金、象牙、飾りの花といった副葬品への具体的な例を挙げての言及から、一つの壺にいく人かの骨が混ぜ合わされ生前の親しい関係の永続を願う例、墓や埋葬品に描かれた絵の中でも特にキリスト教徒は聖書の物語中の復活をイメージしたものが多いこと、またもともとは野原や公道のそばといった埋葬場所がやがて教会墓地へと移行していった過程、民族によって異なる埋葬時の死体の方位、火葬と土葬の優劣をめぐって具体例を挙げて論じている。

第四章は、肉体と精神の関係の様々な考え方とその具体的な現われ——肉体を軽視し、靈魂不滅のみを信じた埋葬不要論者のソクラテス、ストイック派、ディオゲネス、いっぽう土葬を重視したピタゴラスと靈魂輪廻信奉派など——について、また埋葬時の習慣の象徴的意味——火の点け方、三度の別れ、再生を意味する常緑樹を投げ入れること、天上での魂の調和を象徴する音楽を奏でること、墓の中の死者の体位色々、頭から出るか足を先にして出るかなど——について語り、あるいはまったく無意味な習慣——死者の最後の息を吸い取ってやること、死者の物真似、男の死体に女の死体を混ぜて焼くこと等等——についても言及している。つづいて文学作品に登場する死者たち——ホメロス、ウエルギリウス、ダンテなどによってそれぞれ描かれ方が違う黄泉の国の亡霊たち——のこと、そして死後のこと

が分からなかった古代人の不安と不死への願いとの対比でキリスト教の説く死後の魂の不死と安寧により救われている現代人の有難さを説く。

これまで色々と死と死後に関して述べてきたことの結論として、第五章終章で著者は、古来より人間は骨を残し名を残そうと虚栄心に駆られて墓碑銘を刻み、ピラミッドを造りといろいろにやってはきたが、人間は忘却の動物であり、善行必ずしも悪行より存続する保証はなく、神の予言したこの世の存続期間の2000年まであと500年足らずのいま、忘却より逃れ出ようとすることは、結局は空しいことだ、神が約束した靈魂の不滅以外に真に不滅なものは何もないと知れというのである。

＊

＊

さて、このような内容を持つ『ハイドリオタフィア』を漱石が『三四郎』の中で最初に持ち出すのが第十章で三四郎が病氣見舞いに先生を借家に訪ねたときのことである。このとき地方の中学校を辞職して生活に困ったある柔術の学士が来客中である。広田先生は書斎から「表紙が赤黒くって、切り口の埃で汚れた」書物を持ってきて、三四郎に「退屈なら見ていたまえ」といって差し出すのがこの本である。

それを受け取った三四郎が最初に目にするのが、「寂寞^{じやくもく}の罌粟^{けいりく}花を散らす^{えいごう}やしきりなり。人の記念に対しては、永劫^{えいごう}に価するといなとを問うことなし」という一句である。先ずは語句の問題から考える。この一句、日本語訳の意味がお分かりであろうか。白状するが、私にはこれだけでは何のことか皆目検討がつかない。失礼だが、およそ平均的な漱石の読者で、特に最初の文の意味の分かる人が、果たしているのであろうか。しかも全集も文庫本もどれを取っても注釈は何もない。

まず「寂寞」とは何か。これくらいは国語辞典を引くと分かる。岩波国語辞典第四版によると、「ものさびしく静まっていること」とある。この文の主語は「寂寞」であろう。動詞(述語)は「散らす」。目的語は「罌粟花」。すると寂寞が罌粟花を散らすということになる。これでは意味不明である。

一步譲って、寂寞が主語ではないとしよう。何かが寂寞の内に罌粟花を散らすとすれば、その何かとは一体なんであるのか。いくら想像力がたくましくとも、こればかりは分かるまい。

さらに何で罌粟花なのか。散らす対象が桜であってはいけないのであろうか。罌粟花でなければいけない必然性があるのであろうか。

読者の中には、これは漱石ではなく三四郎が訳したものだから、漱石の責任ではないと弁解する人がいるやも知れない。だがこと漱石の小説で彼が引用し訳したものは、たとえばメレディスのように如何に難しいものであっても、画工が訳したから間違っているといった場合はない。してみると、やはりこれは漱石の手になるものと考えざるをえない。

では原文はどうか。...the iniquity of oblivion blindly scattereth her poppy, and deals with the memory of men without distinction to merit of perpetuity. ちなみにこれを正確に訳すとこのようになる。「不公平な忘却はあたりかまわずその芥子の花を撒き散らし、当然後の世にまで残るべき功績にも無関心に故人を扱うものだ」。

これで文の意味がすっきり通る。つまりこの文の主語は「寂寞」ではなく「忘却」なのであり、芥子の花とは忘却の持つ阿片的性質を指している。原文のコンテキストに従うと、人間は善行をしたからといって後の世の人の記憶に残るものではない。悪いことをした奴が残っている場合があるではないか。人の記憶ほどあやふやなものはない。人間は忘却の動物だと心得て、そのようなあやふやなものを頼りにするべきではない、と作者ブラウンは言っているのだ。

さて今度は『三四郎』のコンテキストに戻ろう。上述のように、中学を辞職し、妻を国元へ預けた生活難に直面した男が広田先生に人生相談に来ている場面である。この男に対し、先生は「現代人は事実を好むが、事実に伴う情操は切り捨てる習慣である」とか「我々はこの悲劇を悲劇として味わう余裕がない」とか言っている。つまり今の人間は自分のことで切迫している

ので、人のことにはかまっていられない、辞職した悲劇の人に同情してやる
ことが出来ないというのである。

ついでながら、「事実に伴う情操」というのは漱石が『文学論』にいう
例の「F + f」ではないか。現代人にはF（事実）のみ有って、f（情操）
が欠けているというのは、言い換えれば、現代人はF + f から成る文学が分
からない、あるいは文学とは無縁の生活に追われているということになる。

ここまででも『三四郎』のコンテキストに『ハイドリオタフィア』からの
引用部分が幾分か意味を持つてくることが分かるであろう。つまり人間なん
て当てに出来るものではないということである。さらにこれがもっとびたり
と納まるように事態は進展する。先を続けよう。

三四郎は先生と客の話が長引きそうなので、本を持って表に出る。行先は
美禰子が肖像画を描いてもらっている画家原口さんのアトリエである。勿論
借りた金を返すというのは口実で、三四郎の本心は美禰子に逢わんがために
ほかならない。

途中の往来で三四郎が読むのが、『ハイドリオタフィア』の末節である。
この訳は三四郎がしたにしては正確な名訳である。まず念のためにこれを引
用する。

朽ちざる墓に眠り、伝わる事に生き、知らるる名に残り、しからずば滄
桑^{そう}の変に任せて、後の世^{のち}に存せんと思う事、昔より人の願いなり。この願
いのかなえるとき、人は天国にあり。されども真^{まこと}なる信仰の教法よりみ
れば、この願いもこの満足も無きがごとくにはかなきものなり。生きる
は、再^{ふたたび}の我に帰るの意にして、再の我に帰るとは、願いにもあらず、望
みにもあらず、気高き信者の見たるあからさまな事実なれば、聖徒イ
ノセントの墓地に横たわるは、なおエジプトの砂中にうずまるがごとし。
常住の我が身を觀じ喜ばば、六尺の狭きもアドリエーナスの^{たいびょう}大廟と異
なる所あらず。成るがままに成るとのみ覚悟せよ。

参考のため、漱石研究者あるいは注釈者の常に怠っている原文を以下に挙げる。

To subsist in lasting monuments; to live in their productions; to exist in their names, and predicament of chimeras, was large satisfaction unto old expectations, and made one part of their Elysium. But all this is nothing in the metaphysics of true belief. To live is indeed is to be again ourselves, which being not only a hope but an evidence in noble believers, 'tis all one to lie in St. Innocent's Churchyard as in the sands of Egypt: ready to be anything, in the ecstasy of being ever, and as content with six foot as the moles of Adrianus.

ついでながら、漱石訳にいう「聖徒イノセントの墓地」についての漱石全集をはじめ文庫本の註は、イノセントをインノケンティウス三世ではないかとしたり、不明としたりしているが、「聖徒」と名のつくのは一世（401-17、ローマ教皇）だけであるし、またこの墓地に関しては何んらその所在や特徴がこれまで述べられたことがない。墓地はパリにあって、そこでは死体がすぐに土に還えるのだと著者自身の註にあることを付記しておく。

上述した三四郎のこの文体に関する印象「まるで古いお寺云々」はこの引用のすぐあとに続くものであり、さらに三四郎は、この文にいうところと目下自分が直面している現実との隔たりを次のように自覚する。あるいは漱石が三四郎の心を次のように代弁する。

贏^かちえたところは物寂^さびている。奈良の大仏の鐘をついて、そのなごりの響が、東京にいる自分の耳にかすかに届いたと同じことである。三四郎

はこの一節のもたらず意味よりも、その意味の上に^は這いかかる情緒の影をうれしがった。三四郎は切実に生死の問題を考えたことのない男である。考えるには、青春の血が、あまりに暖かすぎる。目の前には眉を焦がすほどな大きな火が燃えている。その感じが、真の自分である。三四郎はこれから^{あけぼのちょう}曙町の原口の所へ行く。(十)

そこに子供の葬式がくる。三四郎は「美しい弔い」とは思うものの、いささかも同情がわからない。憐れとは思わない。これは先ほどの広田先生への来客に対する三四郎の「情けなくなった」という反応と同じである。「切実に生死の問題を考えたことのない男」である三四郎にとって、あの来客も、子供の葬式も、そしてまたトマス・ブラウン卿の文章もことごとく他人事である。F（事実）ではあるがそれに伴うべきf（情操）が欠落している。だから漱石は次のように説明する。

三四郎は人の文章と、人の葬式をよそから見た。もしだれか来て、ついでに美禰子をよそから見ろと注意したら、三四郎は驚いたに違いない。三四郎は美禰子をよそから見るができないような目になっている……。遠くから、寂滅の会を文字の上にながめて、夭折の哀れを、三尺の外に感じたのである。

「青春の血」が「大きな火」となって燃えている生の世界に、突如顔を出すのが現実の悲劇であったり、死であったりする。後者を無視して前者にのみとられると「あぶない」。これぞまさに広田先生が警告を発した「メメント・モリ」に違いない。広田先生は自らも「あぶない」と警告を発し、また書物の形で「メメント・モリ」を発したわけだ。

しかし「とらわれ」なければ青春の血なんてものは燃えもしなければ、くすぶりもしない。三四郎という存在の意味は消えてなくなり、小説『三四

郎』も消え失せることになる。では漱石は青春を際立たせるために、「メント・モリ」をそばに置いてみせたのであろうか。

三四郎にとって広田先生は「霜降の外套を着」（十一）て、三四郎たち「若い男の活気」（同）に満ちた往来に一人寒く「長い影」（同）を引く、「歩調においてすでに時代錯誤」（同）の存在でしかない。「二へん繰り返すと歩調がおのずから緩漫になる」（同）「ハイドリオタフィア」という音こそ広田先生その人である。

さて広田先生との関係で、もう一度『ハイドリオタフィア』が三四郎の意識にのぼる場面を見ておこう。佐々木与次郎が書いた「偉大なる暗闇」という論文で、先生がある新聞から酷評されたのを謝りに行く場面である。先生は昼寝をしており、目が覚めるまでの間三四郎は「返そうと思って、持ってきたハイドリオタフィアを出して読みはじめた。」

ぼつぼつ拾い読みをする。なかなかわからない。墓の中に花を投げることが書いてある。ローマ人は薔薇を affect すると書いてある。なんの意味だかよく知らないが、おおかた好むとでも訳するんだろうと思った。ギリシア人は Amaranth を用いると書いてある。これも明瞭でない。しかし花の名には違いない。それから少しさきへ行くと、まるでわからなくなった。ページから目を離して先生を見た。まだ寝ている。なんでこんなむずかしい書物を自分に貸したものだろうと思った。それから、このむずかしい書物が、なぜわからないながらも、自分の興味をひくのだろうと思った。最後に広田先生は必境ハイドリオタフィアだと思った。（十一）

『ハイドリオタフィア』原文では、たしかに墓の中に花を投げることを書いた箇所が出てくる。Chapter 4 中である。「affect する」を「好む」とするのは正しい。また Amaranth は原文では amaranthus となっており、アマランス、別名『常世の花』という意味を持つ。「それから少しさき

へ行くと、まるでわからなくなった。」とあるが、この先は火葬の薪に再生の意味を込めた常緑樹を使用すること、死者の天国での魂の調和を意味するべく葬儀に楽器を演奏すること、歯の生えない子供は火葬に付さないこと、火葬のあとは家でしばらく火を使わないこと、墓の中での死者の体位、出棺時に足を前にすることの意味等々と続く。あとは付録『『ハイドリオタフィア』概略』を参照されたい。

とにかく『ハイドリオタフィア』は「むずかしい書物」ではあり、「わからない」のに三四郎の「興味をひく」書物だというのである。むずかしくてわからないが興味をひく存在＝『ハイドリオタフィア』＝広田先生というわけである。（またむずかしくてわからないが興味をひく存在ということになると、里見美禰子もそうである。だが、彼女は広田先生のように「時代錯誤」的ではなく、むしろイブセン流の新しい女であるから、ハイドリオタフィアというよりは、「迷える子羊」なのである。）

広田先生は与次郎のしでかしたことにそれほど腹を立てたり、新聞の酷評を気に病んだりする人間ではない。ある意味では『ハイドリオタフィア』の著者ブラウン卿がいうように、人間のすることをすべて愚かな虚栄のなせる業と諦観していると思われる。「ぼくくらい世の中に住み古した年配の人間なら」（十一）と先生はいう。

その先生が昼寝の時に「生涯にたった一ぺん会った女に、夢の中で再会した」（十一）話を三四郎にするが、これがすこぶる『ハイドリオタフィア』に関係ありそうだからおもしろい。もっとも広田先生はそんなこと何も断わってはいないが。

顔に黒子がある十二、三のきれいな女で、会ったのは二十年前だという。その夢では先生は「大きな森の中を歩いている」というが、この森は人間の心の奥、無意識の世界を暗示していて興味深い。「宇宙の法則は変わらないが、法則に支配されるすべて宇宙のものは必ず変わる」——このようなことを考えて森の中を歩いているとき、突然その女に逢ったというのである。女

は二十年前と同じ服、髪型、顔をしているので、先生がなぜあなたは少しも変わらないのかと問うと、女は二十年前に先生に逢ったときの姿でいたいからこうしているのだと答えたので、先生は自分ではどうして年を取ったのだらうという、女は先生があの時よりも、もっと美しい方へほうへと移りたがるからだと教えたというのである。「その時ぼくが女に、あなたは絵だというと、女がぼくに、あなたは詩だといった」という。

十二、三から成長を停止した女という、まるでワーズワスの描くルーシーのような少女ではないか。あるいは漱石は、ルーシーを思い起こしていたのではないかとも思える。漱石は『文学論』の中で、ワーズワスの「ルーシー詩群」(Lucy poems)に何度となく言及しているからである。

それはさておき、私が注目したいのは、〈不変の宇宙の法則〉を代表しているのが、この夢の女であって、〈法則に支配されて変化するもの〉の代表が夢を見ている先生であるという関係である。否、正確には、この夢の女は先生とは別ものではなく、明らかに先生の心の奥深い部分を代表しているといったほうがよい。それが『ハイドリオタフィア』と関係があるといったのは、〈不変の宇宙の法則〉をキリスト教の靈魂不滅こそ真の不変なるものであって、その他はすべて空しく変化するものとする『ハイドリオタフィア』のテーゼが、この夢に踏襲されていると思えるからである。三四郎が『ハイドリオタフィア』を読んでいると同時に先生はこの夢を見ているのであって、ユングのいう「共時性」の概念には格好の対象ではないか。

二十年前に先生は実際にこの少女に出会ったことがあるという。それは明治二十二年憲法発布の年に、森有礼文部大臣が殺され、その葬儀に高等学校の生徒であった先生は参加して行列を見送っていたときに、その行列の中に少女を見たという。葬儀の様子は思い出せないが、この少女だけは覚えていっているというのである。「その当時は頭の中へ焼きつけられたように熱い印象を持っていた」(十一)という。それで結婚しなかったのかと三四郎が問うと、先生は「それほど浪漫的な人間じゃない。ぼくは君よりもはるかに散文

的にできている」と返事するが、さらに理由を追及する三四郎に向かって先生は、ハムレットに似たような人はたくさんいるといい、たとえばといって、興味深い例を挙げて説明する――

父が早く死に、母一人に育てられた子供が、母の臨終の間際に自分が死んだらある男の世話になれと、これまで聞いたこともない名をいい、それがお前の本当の父だという。そういう母を持った子は結婚に信を置かなくなるのは当然だろう。

こう言った先生は母が死んだのを憲法発布の翌年だと付け加えるのである。これは何を意味するのであろうか。ここから読み取れるのは、森文部大臣の死と先生の母の死が重ねあわされて深い結び付きを持つに至ったこと、しかもその母はハムレットの母の不義と重ね合わされていることである。つまり、先生は不義の母を記憶の底に埋葬するために、葬儀の行列の少女の姿と結び付けた。そうすることで、母を少女として永遠に成長させることなく心の奥の壺に封じ込めたのではなかったか。

少女は先生そのものでもあるといったのは、そうした意味においてである。先生の無意識の願望の投影だといえるのではないか。『ハイドリオタフィア』はここでも、先生の心の中で、有効に働いているということが出来る。

先ほどルーシーと夢の少女との類似に触れたが、先生はルーシーに恋するワーズワスのように夢の少女に恋して、結婚を棒に振ったわけではないから、自らいうように「散文的」ということになるのであろう。だが夢の少女を成長させないでいるという心理的メカニズムは、やはりワーズワス的である。それが二十年たった今なぜまた夢の中に登場して来たのであろうか。はじめて見たときの「熱い印象」は「年をたつにしたがってだんだん薄らいで来た、今では思い出すこともめったにない。きょう夢を見るまえまでは、まるで忘れていた」(十一)という。

これはどういうことなのか。おそらく先生の心の中では、不義の母に蓋を

して心の奥底に葬り去っておくのに、つまり意識にのぼせないでおくために二十年の歳月を要した。ところが今やっとそうした機制から心を開放しても大丈夫な年頃に立ち至った。それで機制をはずされた少女が姿を顕わした。亡くなった当時の母の思い出と結びついて昔のままの姿を顕わした、ということではないだろうか。

不義の母の問題は『彼岸過迄』の須永が直面する父の不義のまさにアンティテーゼである。これは漱石の最も奥深い部分に関わる問題であり、意味深長である。

そして『彼岸過迄』の須永の千代子への嫉妬は『こころ』の先生による友人Kへの嫉妬に連続するのであり、三四郎と広田先生の関係を『こころ』の語り手の「私」と先生の関係が再現するのであってみれば、これは漱石文学の最も難しい部分の先蹤をなすものとして、看過出来なくなる。

さらに言えば、広田先生は、『彼岸過迄』の松本の、『こころ』の先生のこれまた先蹤であることを考えると、世間から身を引いた消極的な、「時代錯誤」的存在として、軽んじてよい人物では決してない。その広田先生は、まさしくブラウン卿が『ハイドリオタフィア』にいう人間存在とは何かを悟った人物といってよい。

最後に、17世紀フランスを代表する古典主義の画家、ニコラ・プッサンの描く〈アルカディアの羊飼いたち〉(1630年代末)の中で羊飼いたちの見つめる墓碑銘が、「われアルカディアにもあり」であったことを抜きにしては拙論を終えることは出来ない。青春の楽園にある「メメント・モリ」こそこの絵のテーマであり、それはそのまま『三四郎』のテーマでもあるからである。(1997・3・18)

註

- (1) 漱石作品論集成第五巻『三四郎』所収「夏目漱石『三四郎』(絵に還った美禰子)」桜楓社刊 1991(『分析批評入門』1967初出)

- (2) 夏目漱石『三四郎』(角川文庫)。以下の『三四郎』からの引用はすべて同書による。章数のみを記す。
- (3) Sir Thomas Browne, *Hydriotaphia Urn-Burial, or A Brief Discourse of the Sepulchral Urns lately found in Norfolk* (1658) (from R. H. A. Robbims ed., Sir Thomas Browne, *Religio Medici, Hydriotaphia, and The Garden of Cyrus*, Clarendon Press, Oxford, 1991) 以下原作よりの引用はすべて本書による。

追記

拙論を書き終えてのち、これまでも海老池俊治氏が『ハイドリオタフィア』に触れて漱石の引用箇所が原文のどれにあたるのかを、実際の原文を註にあげていることを知ったので、そのことを付記しておく。『明治文学と英文学』(明治書院、昭和43年、207頁の註)参照のこと。海老池氏の言及は、一応原文にあっている点では価値があるものの、なぜこれが漱石によって引用されたのかについては、「我知らず惹きつけられる不可解な存在広田先生を象徴するものとして、まさに恰好であったろう」(同書、206頁)というのみであって、それ以上の『三四郎』という作品との深い結びつきの解明は何等なされてはいない。

また拙論の校正中に飛ヶ谷美穂子氏から佐々木昭夫編『日本近代文学と西欧——比較文学の諸相——』(翰林書房、1997)所収の同氏の論文「ハイドリオタフヒア、あるいは偉大なる暗闇——サー・トマス・ブラウンと漱石——」のコピーを受けとった。その中で氏は筆者が本論で言及しなかった事柄——たとえば、ブラウン卿の生涯への漱石の関心事とか、坪内逍遙とラフカディオ・ハーンによる講義録からの漱石への影響といったきわめて重要な事柄——の事実関係を事細かに立証していることも付記しておく。

《付録》

トマス・ブラウン卿著『ハイドリオタフィア：壺葬論——ノーフォーク州にて近頃発見されし骨壺に関する短き論述』概略

(Sir Thomas Browne, *Hydriotaphia Urn-Burial, or A Brief Discourse of the Sepulchral Urns lately found in Norfolk* (1658) (from R. H. A. Robbims ed., Sir Thomas Browne, *Religio Medici, Hydriotaphia, and The Garden of Cyrus*, Clarendon Press, Oxford, 1991)

CHAP. I

第1章でブラウン卿は、葬儀の様々な様式、つまり土葬、火葬、水葬などの具体的な実行国とその宗教儀式的の意味を説いている。

多くの人が散々に苦心して死によって肉体から分離された魂のあり様を理解せんとしてきたが、わけても人類は消滅した肉体の処理方法について特異なる工夫を凝らしてきた。その中で最も素朴な民族は簡単な土葬と火葬の二つの様式に従った。

大地はこれまで墓場としての名をほしいままにしてきたが、水と言えどもノアの洪水に見られるように40日の内にほとんどの人類と生き物を飲み込んでしまったのだから、最も見事な墓場であったと言えるのではないか。

土葬の最も古い例はアブラハムや長老たちの埋葬に見られるし、アダムでさえダマスカスの近くに埋葬されたとされる。また神自身が行なった唯一の埋葬がモーセのそれである。これらのことから土葬が他のものより起源が古いといえよう。

だが火葬も古くから行なわれていて、かなり頻繁であったことも事実だ。アルゲウス (Argeus) を火葬にしたヘラクレス (Hercules) の例を引くまでもなく、ホメロスの叙事詩ではパトロクロス (Patroclus) とアキレス (Achilles) の火葬の見事な例があるし、少しさかのぼればテーベ戦争で

はメノエセウス (Menoeceus) とアルケモルス (Archemorus) の厳かな火葬がある。また『イリアッド』にいうトロイの門前でヘクトール王 (Hector) の火葬、アマゾンの女王ペンテシリヤ (Penthesilea) の火葬がある。またアジアの内陸部では長らく火葬が行なわれてきたし、ユリアヌス王 (Julian ローマ皇帝、361-3) の当時の頃までキオニアの王グルンバテス (Grumbates) が息子を火葬に付し、その灰を銀の骨壺に入れて埋葬した。

火葬はまた東ヨーロッパのヘルリア人、ゴート人、スラシア人の他にも、ケルト人、サルマチア人、ゲルマン人、ゲール人、デーン人、スエーデン人、ノールウエー人、さらにはカルタゴやアメリカでもおこなわれた。古代ローマではプリニウスが言うよりもっと古い——執政官のマンリウス (Manlius) が息子を火葬にしているし、ヌーマ (Numa) は遺言により特に火葬よりも土葬を望んだとプルタークにはある。またオヴィディウスによるとレムス (Remus) は厳かに火葬に付されたとある。

コルネリウス・シッラ (Cornelius Sylla) はローマで最初の火葬ではなかったが、コーネリア家では最初であった。そして火葬は、頻繁ではないが所かまわず行なわれていたのが、これ以降広まり、一世を風靡するに至る。ただし、烏も火葬されるご時世柄、暴君ネロの奥方ポッパエア (Poppaea) は特殊な墓地理葬を見出したので、火葬大繁盛とはならなかったが。いかなる習慣にもそれなりの理由はあるのもで、水が万物のもとであるとするターレス (Thales, 紀元前6世紀ギリシャ哲学者) に従って、腐敗の原理に委ね、水に解体してゆくを最もよろしと考えたものもあれば、ヘラクレイトス (Heraclitus, 紀元前6世紀ギリシャ哲学者) の教えに従って、火に委ねることを最も自然だとし、薪をうづ高く積み天なる火に近づくようにし、そうすることで、土葬によるウジ虫への見苦しい墮落を拒絶し、肉体の一部を永遠化せんとしたものもある。火による浄火作用を信ずるものは火葬をよしとし、またそうした理由でなくとも、政治上土葬後の死体に対する敵による報

復からそれを守らんがためといったこともあった。上記のシッラの場合もこの理由による。

火葬をこの上なく好んだ者もあれば、これを厳密に拒絶した者もある。インドのバラモン教徒は特に火を好み、生きながら身を焼き、火において生を終えるのを最も高貴なやり方と考えた。アテネにおいて驚いて見守る群集に向かって、「かくしてわれ不死とはなれり」と辞世を残して自らを火に投じた実例がある。片や大いなる拝火教徒であるカルデア人は、彼らの死体を焼くのを忌み嫌った。それは火の神を汚すことにはかならないからである。ペルシャのゾロアスター教司祭も同様の理由で火を使うことを拒み、骨の行方を案じて、肉を猛禽や犬に晒した。インドにおける拝火教徒は、火の格好の材料となる棺台をも潔ぎよしとはせず、死体をハゲタカの餌食に晒す。だが火葬を用いた古代ゲルマン人が同じく彼らの神である土（Herthus）を汚すと恐れたかどうかは、不明である。

エジプト人は火を神として恐れたのではなく、死体を食い尽くしてしまう無情なるものとして恐れたので、防腐処置を施し、乾いた土や立派なガラスケースに入れるという完全なる保存の傑出した方法を編み出した。こうしたエジプト的方法をピタゴラスが吸収し、その結果既出のヌーマ（Numa）とピタゴラス一派は初めて火葬による肉体の消滅を避けたと思える。

スキタイ族は風と剣、つまり生と死を信じて、死体を焼くことなどは決してせず、従って埋葬は拒絶して空中に墓を造った。エジプト近郊の魚食民は海を墓場に好み、目に見える腐敗を拒絶し、元の水に帰した。一方ホメロスの英雄たちは、恐らく魂が火で出来ているとの信念から、それを消し去る唯一の要素である水ないしは溺死を最も恐れた。だからホメロスは『オディッセイ』の中でアイアース・オイレウス（Ajax Oileus）の溺死が完全なる消滅であることを示唆しているのである。

古代バレアレス諸島（地中海西部のスペイン領の諸島）の住民は、特殊様式を持っており、大きな壺と多くの木を用いたが、埋葬には火は使わなかつ

た——彼らは死者の肉と骨を砕き、それを壺に詰め、その上に木を積み上げた。また中国人は火葬も壺葬もせず、死者の墓のそばに松の木を植え、墓の上で数多くの印刷した奴隷や馬の絵を燃やすことで、実物の代用とした。

キリスト教徒は火葬を嫌悪した。彼らは生前火に付されることに拘泥したわけではないが、死後はそれを嫌い、火による消滅よりも土葬により神の教えに従って、死して灰にはなく上に還ることを、キリスト、ペテロ、パウロそして古代の殉教者の例に倣い、よしとしたのである。そしてついには異教徒とのごた混ぜの埋葬を拒絶するに至った。

イスラム教徒はこのような火葬は決して認めない。彼らは墓の中で白と黒の天使から直ちに裁きを受け、起き上がれるように墓の中を虚ろにしておかねばならなかった。ユダヤ人は古い土葬様式を好んだが、時には火葬をも認めた——ヤベシュ（Jabesh）の民はサウルを火に付した例がある——伝染病の伝染を避けるため死体を焼いた場合もある。ユダヤ人は異教の火葬を嫌うことなく、彼らの友であり、ポンペイに対する復讐者でもあるシーザーの死を悼んで幾晩もシーザーの焼かれた場所を訪れたと、スエートーニウス（Suetonius）の『ジュリアス』（*Julius*）にはある。そして彼らは自らの民のために高貴なる記念碑や霊廟を建てたばかりか、メディアやペルシャの王のためにエクバタナにあの永遠の霊廟を残したダニエルの例に倣って、他の民族のためにもそれらを建てた。

だがユダヤ人はローマへの服従と最も苛酷な扱いの時でも、火葬というローマのやり方に同意はしなかった。だから処刑されたキリストの肉体に関する予言が守られたのだ——つまりキリストの肉体は朽ちることなく、骨の一つも折れることなしという予言である。

またユダヤ人はエジプト人と長らく共存してきたが、死体をミイラにして完全なる復活を不可能にしてしまうやり方には没入していかなかった。たしかに彼らは火葬は取り入れなかったが、ギリシャ人やローマ人の葬儀と一致する多くの儀式を持ったことも事実だ。墓場での嘆きとか、音楽の調べと

か、嘆きの送別者とか、死者の目を閉じることや、死者を洗い、膏油を付け、キスをすることなど——これらは単に異教徒の物真似だとはいえないが、悲しみの調べとか三度アブサロムに呼びかけるやり方などは他の民族との関わりを想起させるに足る。

CHAP. II

火葬と骨の埋葬による肉体の一部の永遠化およびその英国における起源など——特にローマ支配による大いなる影響をめぐって。

著者は火葬ないしは土葬の儀式について多くの者がすでに厳かに述べたことを繰り返すつもりはない。ただ骨壺に残る最後の永続せる骨についての言及は、最近の発見ともあいまって、完全に省略するわけにはいかない。

古代のウォルシンガム（Walsingham）の野原で、幾月前にもならぬ頃、40から50近くの骨壺が掘り起こされた。それらは乾燥した砂地に置かれており、一ヤードも深くはなくて、お互いがそれほど離れてはいなかった。厳密には一人物の者ではないが、その大半が以下の記述に合致するものであった——あるものは2ポンドの骨を含んでいて、頭蓋骨、胸骨、顎骨、腿骨および歯と区別可能であり、火葬のあとくっきりとしていて、加えて副葬品が、小箱とか、人念な仕上げの櫛とか、真鍮道具の取っ手とか、真鍮の髪留とか、またはオパールなどであった。

同じ地面の6ヤード以内で、石炭や灰化した物質が掘り出されたが、この場所が火葬場ないしはマネス（祖先の御霊および冥界の神がみ）への犠牲の祭壇であったことを思わせる。それは神ないしは英雄の祭壇が地表の上にあるのとは対照的に地表の下にあった。

これらの壺がローマ人のものであったのは、共通の風習と埋葬場所からして、ほぼ間違いはない。つまり、ローマ軍の駐屯地にほどちかく、古記録によればブラノドヌム（Branodunumu）という名で印されたブランカスター（Brancaster）からほんの5マイルの所、そして7つの教区を持つ隣

町がいまでもバーンハム (Burnham) という名を持つところであり、近隣地区はローマ人かローマの風習を守るローマ化されたブリトン人の居住地区であったと思われる。

ローマ人が早くもイングランド東部のこの地方を占有していたことはありえぬことではない——確かに我らはコンスタンチヌス帝 (306-37) の新政権とサクソンの沿岸支配前のこれらの場所のローマ支配を思わせる厳密な具体物には出くわさないし、サクソン人侵入時にはダルマチアの騎馬兵がブランカスターに駐屯していたが、ローマ将軍クラウディウス (Claudius, 41-54)、ウェスパシアヌス (Vespasian, 69-79)、セヴェルス (Severus, 193-211) の頃には、ローマ3レギオン軍団がブリテンのこの地に散らばっていたことを知っている。早くもクラウディアスの頃には、大きな転覆がローマの大將オストリウス (Ostrius) によってイケニ族 (the Iceni, 東部イングランド Norfolk および Suffolk 地方に住んだ古代ケルト族) にもたらされた。まもなく国は大層乱れ、よりよい統治を願って、プラスタグス (Prasutagus) が彼の王国をネロとその娘たちに譲ったが、女王のボアディケア (Boadicea、イケニ族の女王で、ローマ人支配に叛旗を翻し惨敗した) はパウリヌス (Paulinus) と最後の決定的な戦いをした。その後、ウェスパシアヌス帝の大將アグリコラ (Agricola) による征服により、ローマ人がイギリス全土を支配し (A. D. 78-85)、駐屯地と居住地に区分けした。従ってウェスパシアヌスの頃には既にこれらの地域はローマ軍の居住地であった可能性がある。のちにここにサクソン人が定住するが、その人口まばらな地図にはまだウォルシンガム (Walsingham) の名を見ることが出来る。さてイケニ族がその語源通り、ガマディム (Gammadims) ないしはアンコニア族 (Anconians)、あるいはブリテン島の角、端、肘に住むものであるとするなら、この地方こそその呼び名に最もふさわしく、イケニア (Icenia) のイケン (iken)=肘を形成するものである。

ブリテンはシーザーの記録に見られるようにかつては人口多数であり、

ローマ人は7万を数えた。そのローマ人の居住地が何処であったかは今では大半は知りえぬが、幾らかは残した仕事、塁壁、コイン、および骨壺により彼らの所有物が実証される。歴代のローマ皇帝の年代を刻んだコインが数多く掘り出されている。クスレッド (Cuthred)、カヌートス (Canutus)、ウィリアム (William)、マティルダ (Matilda) といったようなノルマン、サクソン、およびデーン人のコイン発見に加え、ブリティッシュの金貨もちろはらと、また銀貨は数多くノリッジ (Norwick) 近くで発見されている。

ローマ人が征服した国に多くのコインを埋葬した理由ははっきりしないが、恐らく蛮人の侵入時に居住地を見捨てるときコインを埋葬したのではないか。サクソン人のコインはほとんど残っていないが、それは彼らのコインが次なる征服者の手で別のコインに鑄造され直されていったからだ。

さて、これらの骨壺の埋葬された年代あるいは古さということになると、これほど不確かなものはない。骨壺はどう考えてもローマ軍の支配以前のものではない。(ローマによるブリテン島支配はジュリアス・シーザー (Julius Caesar, B. C. 55) に始まり、アグリコラによるイングランド全土支配 (A. D. 78-85) を経て、ローマ軍ブリタニア撤退 (A. D. 407) に終わる、4世紀に及ぶ——筆者註)

不思議なのはノーフォーク州の骨壺からはローマ皇帝の年代を示すメダルやコインが出土していないということである。副葬品としての涙壺 (lachrymatories)、ランプ、酒壺等も欠如している。このことと火葬の終焉と関係があるのであろうか。あるとすればその終焉はいつのことか。それはA. D. 220年頃と推測される。だとするとこれらの骨壺は約1300年前のものということになる。(ちなみにこの本は1658年出版——筆者註) しかも火葬の終焉がローマだけで、その他の地方ではやめられていたかどうか分らない。

言いうことは、結局キリスト教が完全支配を達成するに及んで、火葬が

消滅したのは確かだということである。

これらの骨は、男・女・子供と埋葬する場所をそれぞれ区別する習慣があったのだが、それに基づいても、それらが男・女・子供とはっきりと断定できない。ただほっそりした骨、頭骸骨の薄さ、歯や胸骨や腿骨の小ささからして、その多くは年少者ないしは女性の骨とおぼしきもので、副葬品は先ほど述べた欠如の代わりに、既に述べた副葬品——櫛、小箱、真鍮のハンドル等が見られる。

火葬の習慣はローマ遺跡だけに限られるかどうかをめぐって——古代ブリトン人が火葬をしたかどうか証拠がないが、少なくともローマ支配ののちはローマ文明の影響を受けて火葬が行われたのではないかと思われる。

古代ゲルマン民族はヨーロッパ大陸ではたしかに火葬の習慣があった。さらにデン人や北方の民族では少なくとも君主や主たる支配者たちは火葬にした。火葬がこれらの北国でいつ終焉したのか分からないが、英国にデン人が侵入したころ（デン人の侵入は9～11世紀始めにかけて——筆者註）には既に火葬はおわっていた——つまりイギリスの火葬の習慣はローマの支配時代のものであるといえる。

ただしノールウエーやデンマークでは、ローマ発祥でない壺が多く発見されていることも事実である。ひょっとしたらイングランド内で見つかっている環状石の跡やみたまや、大きな壺などが、ノールウエーやデンマークの火葬と埋葬に関係があるかもしれない。

CHAP. III

漆喰を塗って白くした墓が土葬様に好んで用いられ、厳格なユダヤ人は清廉潔白の土の墓に装飾を施した。エウリピデスの『ヘキューバ』(Hecuba)に登場するユリシーズは、生前は如何に貧しかろうが死後高貴なる墓に入れるのであれば平気であった。偉大なる人物は大きな記念碑を好み、美しく大

きな骨壺は卑しいものの骨を入れず、という訳で我らが発見する壺には大きさや壮麗さの点で相違が生まれたのである。発見された壺は一様の大きさではなく、最も大きいので1ガロン以上入るくらいで、あるものはその半分にも満たないものもある。またすべてが同じ形態でもない——形態に関しては同一地域でも異なった地域でも厳密な統一性は見られない。ただし取っ手や耳や長い首を持つものも多いが、大抵が円状の形で、球形である。何故そのようなのかは、なんらかの神秘的な意味からか、最も長持ちするからか、あるいは最もよく入るからか、よく分からない。だが首のついた円形の壺が普通一般で生まれ出るときの母の胎内に似た形であり、地中の壺は母の胎内というわけである。

多くは赤色だが、今回のものは黒色で、粘土（clay）をしっかりと焼いたのかあるいは、煉瓦やタイルやポットや土器と一緒に古いやり方でオーヴンないしは太陽に焼かれただけかもしれない。粘土は埋葬用の壺だけではなく地上の彫像（例えばヘラクレスのような）、あるいは霊廟（例えばマウソロスのような）、また粘土の棺桶などにも用いられた。

偉大なる者は粘土ではなく銅や銀や金や斑岩などの壺を好んだ。壺に遺言「この世が保持できぬ者を汝が保持せよ」と記したローマの皇帝セヴェルスはこうした壺に入っている。今回発見のいくつかには壺の中が輝いており、小さな光る金属紙の包みもあって、銀メッキされていたのではないかと思われる。

発見の骨壺の覆いについてであるが、それらの覆いの説明は得られず、ただ一つが煉瓦細工で覆われていたようだ。他の場所で発見されたのでは、レンガ、タイル、石あるいは土の覆いなどが見られる。『イリアッド』の中でホメロスはパトロークルス（Patroclus）の壺は紫の絹の衣で覆われているという。覆いのないものは土を詰め込んで蓋をしており、今回発見のいくつかはこれであり、それには骨と灰が土や壺に固くくっ付き、しばむぎ（バーミューダグラス）が骨に絡み付いていた。

今回発見の田舎の壺には、ランプも、酒壺も、涙壺も入っていない。これらは普通祖先の霊や神がみに捧げたり、死者の友人の悲しみを表わすものである。ある墓では酒が時を経てジェリーに変質したものもある。ある墓ではまだブドウ酒としての特質（色・味・香り）と精気を保持しているのも発見されているが、その味たるや121 B. C. ヴィンテッジの銘酒オピミアン・ワイン（Opimian wine）といえどもモノの数ではない。何となれば酒は統治者の統治年月（収穫時に統治者の年号を付した）などの短期間で測るものではなく、500年を単位とする王国の歳月で測らねばならないからである。

その他副葬品として、ある墓からは指輪、コイン、灰、歯に使った金、一見木と思われた骨とか象牙なども見つかっている。埋葬された植物では、聖フンベルト（St. Humbert）の墓の中で発見された緑のままの月桂樹の乾燥葉があり、150年そのまま人を驚かせた。過去にはダイアナの寝殿の杉が何百年も生きていたので見るものを驚かせた例もあるし、ノアの箱船の杉の木とアーロンのオリーブの杖はバビロン補囚時にはもっと年老いていた。一見して木と思われなかったものでも、結局の所それが骨と一緒にになっている木の変質した石炭の場合がある。石炭はアルテミス寝殿（the great Ephesian temple）の基礎となったものだし、古代の境界識として永続したものである。

金属では象牙細工を留めていた小さな鉄のピンがその力を失ってはいなかったし、また真鍮性のものでは、その耐久力よりも腐食を免れているのが珍しかった。

さて壺を埋葬するにあたってそれを飾るものが一緒に入れられた。その代表は花である。プルタークによるとフィロポエメン（Philopoemen）の壺には花とリボンがたっぷり入れられた。厳格なリクルグス（Lycurgus, スパルタの伝説の立法者——筆者註）はオリーブとマーテルを入れるのを許した。デモクリトスの蜂蜜付けの埋葬には、それを国の必需品の浪費としてアテネ人は当然反対したであろうが、プラトンの場合にはこれまたけちな

ほどの節約家であって、埋葬を許可したのは四つの英雄詩と、最も不毛の場所を墓場と指定した（もっとも、裏切りものユダが良心の銀貨30枚であがなった the potter's field のごときはいくらなんでも我らとしては願ひ下げというものだ）。

今回発見のノーフォークの骨壺には土が中の灰と混じってしまっているが、骨はしっかり焼かれているのでその中に薄い真鍮皿が溶けたままで発見された。このことからこれらの骨壺は軍隊や伝染病患者や、罪人の場合に見られるようにおごなりに焼かれたものではないこと、つまりこれらは卑しい者たちの骨ではないことが分かる。ローマの the Esquiline Port の郊外では貧者、罪人、卑しい者が焼かれるかないしは犬に投げ与えられたが、このような死体処理が、暴君ティベリウス（Tiberius）に対して企まれた（彼の死体は円形演技場で生焼けにされた——当時の極悪人の処置の仕方であった）、また暴君ネロ（Nero）は死を恐れるよりは己の首が切り落とされ、体が生焼けにされるのを恐れたようだ。

今回調査した壺の中には幾人かの骨を混ぜ合わせたものはないが、こうした風習がないわけではない。スエートーニウスによると、ローマのドミティアヌス帝（Domitian, 81-96）の灰はユリア（Julia）のそれと混ぜあわされたし、ホメロスの『オディッセイ』ではアキレスの灰がパトロークルス（Patroclus）のそれと混ぜあわされ、どの壺も一つの灰ではなかった。

これらはごたまぜの焼却でそうなったのではなく、愛情を持って死者の骨を混ぜ合わせたのであり、生前の関係を死後も続けさせようとの切なる願ひの結果であった。死がそのような結合を否定すると、満たされぬ愛情は墓場での隣同士になり、壺と壺を並べて隣り合うことで慰めを得ようとしたのだ。（まるでヒースクリフとキャサリンのようだ——筆者註）このように生前の関係を続けんがために、多くの者は大きな家族用の壺を造り、親しい友や血縁者が次々と先人に混じり合えるようにしたわけだ。古人は滅びるものにあまり重きを置かなかつたようだ。たとえば人間の骨や頭蓋骨などは墓碑

には描かれていない。エジプトのオベリスクや象形文字にも骨は登場しない。副葬品のランプは墓碑に劣らずよく物語るものだが、それに描かれた絵はみだらで滑稽なものが多い。また墓碑には犠牲の供物やブドウ酒・油の入れ物なども見られる。ローマにあるユダヤ人の地下納骨堂で見られるのは、ほとんどが種類の違ったランプと聖なるロウソク立ての図である。

世捨人として墓で暮らしたアントニー（Anthony）と若いころローマのカタコンベをよく訪れたジェローム（Jerome）の描いた絵には、墓の中の絵としては骨とか頭蓋骨もあるが、キリスト教徒の場合は聖書の物語——特にイーノック、ラザラス、ヨナ、そしてエゼキエルを見るヴィジョン（神がエゼキエルにいう、イスラエルの死者の復活の予言場面——エゼキエルは神の言をそのまま谷に眠る死者の骨に向って繰り返すと、死者が肉体を纏って生き返る光景を見せられる——筆者註）など、復活をイメージした図が多い。（つまりは人間のモータリティ対キリスト教による復活の願いの対立構図が明白である——筆者註）

キリスト教徒の碑文には生年と死亡日がはっきりと書かれているが、なんで死んだかについて記したものはほとんどない。これは歴史上記憶さるべき人物の場合も同様である。ラエルティウス（Laetius）の『思想家たちの生涯』（*Lives of the Philosophers*）では二度ないし三度死なない思想家はいないし、またプルタークでは二回ないし三回死なない人はいない。

確かに死んではいても、死の年代、死に方、場所がはっきりしない場合が多くある。記念碑がいろいろ立てられて本当の墓が分からなくなった場合が多い。たとえばホメロスの記念碑が多すぎて何処の国の人か分からなくなっているし、エウリピデスの墓はアッティカにあるのに、納骨所はマケドニアにあるし、セヴェルスの本物の納骨所はローマであるが、空の墓はガリアにある、といった具合である。

盗掘について。地上高く黄金の壺に安置された骨もその安らぎを知らぬ。こうした壺は多くお宝を狙う輩によって壊されて来たからである。プルター

クによると、ローマの将軍マルケルス（Marcellus268?-208）の灰もかくの如く失われたそうだと。げに、〈世にぬすびとの種は尽きまじ〉である。野蛮極まりない盗人が、これまたばか丁寧な盗みのレトリックをかくの如くに披露するのであるから、いやはや恐れ入りの鬼神母神：「ひとたび地中より取りいだしお宝を、元に戻すにゃ及ばぬ。ゆえなくて土に還えせしものなるは、元に復すが理の当然。記念碑と経帷子もて、亡骸を飾るがよろし、したが、お宝は不要ナリ——なまぐさの商いなど、ほとけにあてはむるは、罰当たりというもの。失いても、いささか咎め立てする者なきを、黙って頂戴するは不正ならず、はたまた物欲を放下したるほとけの世にありては、頂戴されて困るお人はござらっしゃるまい」というわけで。

かつてはほとけの骨や頭髮や爪には魔力が宿ると信じられたが、そうした効力を期待することは空しい時代になってしまった。

『国家』の中でプラトンのあの世の記述者（Er）は、12日間腐敗しないでいる間に、己の魂は死者の色々な段階を見るのであるが、内臓を除去しないで、膏油と洗浄だけで死体を7日間保つのは今日の優れた技術でもってしても危険なことだ。骨と灰をくっつかないように分離する方法は、色々行われてきたが、顕著な発明は骨と灰をくっつかないようにする燃えないリンネルやサラマンダーの毛を使った不燃性のシートを使う方法である。

人の身体は焼かれると塩分が蒸発するので、少量の骨と灰に帰してしまうものだ。

骨の中には見事な骸骨を作るものもあるし、いち早く灰に帰すものもある。水症性のヘラクレイトス（Heraclitus、前500年頃のギリシャの哲学者）が早く燃えるはずはないし、毒殺された兵士は、腹が割れてふた山の薪を消したとプルタークはいう。だがツキディデスがいうには、アテネのペストでは、ひと山の薪が2～3の侵入者を焼くには十分であり、カスティル王（Castile）により束にして焼かれたサラセン人は、焼却燃料があまり要らなかったという。パトロークルス（Patroclus）の薪は100フィートも積まれ

たが、ポンペイウス（Pompey、ローマの軍人、政治家、106-48 B. C.）を焼却したのは古いボートの一片であった。もしイサクの身体が大量虐殺を招来させるに十分であったとすれば、ひとは誰でも己の葬儀用の薪を携えた存在だといえよう。（イサクの身体——神の命でアブラハムが犠牲に薪の上に乗せ殺そうとしたが、神がその心根をよしとして止めさせた——筆者註）

動物からはよい燃料と、火傷用のよい薬が取り出せる。ひとの体液が燃焼の邪魔になりそうだが、成人の身体はそのほとんどが燃える——一部は蒸発し、他は炭化したり灰になる。

旧約にいう石灰を取るためにエドム（Edom）の王の骨を焼くのは理不尽な野蛮行為ではない。骨の効用としては、それを持つのは友情の印であり、またよく焼けた骨は金属の精練などに用いられた。太陽（天）が結合したものを火が分解する（変質させるのではない）。すべてを食らい尽す火はほとんどいつも、すべてのものの母である大地のために一部を残すのであって、やがて時至れば、それをその母が元の姿に還すことになるのである。（天の日——中間の媒体としての火——母なる地という風に、上——中——下と宇宙の構造に言及しているようだ——筆者註）

次に埋葬場所についてであるが、もともとは野原であった（旧約参照——カナン人、アブラハムの一族、ジョシュアの埋葬場所など）。またローマ人にとってはハイウェイ（公道）のそばで通行人に見える所であったが、次第に教会の敷地内に骨が埋葬されるようになった。それは死者の善行を記した墓碑銘による教化の目的による。それが次第に区別がなくなっていき、コンスタンティヌス帝は特に好んで教会の敷地に迎えられ、イギリスで最初に寺院に埋葬されたのは、西サクソンの大君主クスレッド（Cuthred, 740-54）統治下の、758年カンタベリーの大司教カスバート（Cuthbert）であった。

死体の埋葬時の方位についてであるが、ペルシャ人は北南向き、メガリア人とフェニキア人は頭を東に、アテネ人は西向きにした。キリスト教徒も頭を西向きにする。キリスト自身処刑時の十字架上での顔は西向きであったと

いわれることに反対するつもりはないが、画家がキリストの十字架を両脇の十字架よりずーと高く描くのはけしからんことだ。そのような証拠は皆無だし、コンスタンティヌスの母、ヘレナによって発見されたこれらの十字架には長さ大きさに差がない。

つづいて火葬による壺葬と死体のままの土葬との優劣の例を挙げる。土葬の不利な点は、蛆虫に食われたり、蛇の住処となったり、頭蓋骨が酒のボールにされたり、骨が我らが敵を喜ばすためのパイプに姿を変えられたりする不名誉を蒙ることだ。火葬であればこうしたことから免れる。

では土葬の有利な点は何か。いま蛆虫のことをいったが、実際には見つかった例は少ない——教会墓地で一フィート以下であればほとんどないし、教会内では、新しく朽ちた死体の場合、ほとんどないか皆無である。歯、骨、髪はなかなか腐食しない。ある水腫死体の場合、10年教会墓地に埋葬されて、脂肪の凝固物ができた——土のニトロと、死体の塩分とアルカリ性液体が、大きな脂肪の塊を凝固させて、非常に固いカスチール石鹼にしたのだ。これはいわゆる死蠟の最初の例である。

ペルシャ人との戦いで、ローマ人の死体は数日で腐敗したのに、ペルシャ人のは乾燥していて腐敗しなかった。同じ地面でも一樣に解体することはなく、骨もそうである。ただし梅毒の場合は長持ちしない。ドーセット侯の死体（Dorset、1530年に埋葬され1608年に開かれた）は強健でしっかり包まっていたこともあってか、78日のちも腐敗は見えなかった。

最古の骨で残存するものは石化したもので、(創世記のロトの妻の石の柱の例やオルテリウスのいうロシアの原住民の変身の例は除くが) あるものはピラミッドより古い。クセノポン（Xenophon）の『アナバシス』（*Anabasis*）によると、アレキサンダー大王がキュロス王（Cyrus、アケメネス朝ペルシャの創始者）の墓を開いたとき、残存せる骨から身体の大きさが分かった。これが火葬であれば、推測に不利で、個人の特徴が推測され難い。

土葬の利点は、残存する骨から骨格や肉体復元まで可能にすること、また

性の区別も可能、人種などの区別も可能、ダンテの描く人物たちも骨相学から発見可能、頭蓋骨からは能力まで推測可能等々である。したがって、「骨相学は死者を墓場で終わらせずして、我らを超えて生き残れり。」
(... physiognomy outlives ourselves, and ends not in our graves.)

厳しい批評家はこのように残存するものを見て、それを過去の人のよき形見ではあっても、未来の人にはなんら役立たないと考えるかもしれないし、また万物はその生みの親の母なる自然に結局は回帰し、分散した元素を集めてもとの姿を取るのであってみれば（質量不滅の法則？——筆者註）、これらの残存物からの復活を期待するのは余計なことだと思ふかもしれない。

だが魂は不滅であるとすれば、物質である肉体は適切な出来事に恵まれると、復活する可能性がある。げんに聖者たちは、キリストが処刑されたとき、聖なる町の近くの墓地や墓碑から復活したといわれるではないか。古代の長老がこの復活につらならんがためにカナーンに骨を埋め、カルヴァリーの丘から30マイル離れてはいても復活の成就するその土地に少なくとも横たわりたいとしきりに願ったのは、誤りではなかった。

CHAP. IV

肉体と精神（魂）の関係の様々な考え方とその具体的な現われについて。復活を信じるキリスト教徒にも丁寧な葬儀の必要性があった。というのは肉体はキリストの宿りであり、聖霊の寺院であると認識していたことによる。（ユダヤ教から見た）古代の異教徒たちはたとえ靈魂の不滅や死後の存続を信じていなかったとしても、儀式、慣習、行動、表現などにおいてはそうした意見と違うことをした場合がある。デモクリトス（Democritus）はプリニウスが嘲笑する再生説に至ったし、フォキリデス（Phocylides）は死者の肉体は土から光へと帰ることを願っているし、ルクレティウス（Lucretius）は、伝道の書にいう〈土は土に〉を既に言っているし、プラトンがいう前にホメロスは魂には翼があって、肉体を出て死者たちのいる住処に帰ると『オ

ディッセイ』で述べ、また魂と結びついているのが生きた肉体（*demas*）で魂と分離したのが死体（*soma*）であると区別している。ルーキアーノス（*Lucian*）は『ヘルモティムス』（*Hermotimus*）の中で、ヘラクレスに関し、彼の人間の母アルクミーナ（*Alcmene*）に由来する部分は滅び、神ジュピターに由来する部分是不滅であると述べている。（ちなみにヘラクレスは不死を得るために12の苦行をしたことで知られる——筆者註）ソクラテスは、友が埋葬するのは彼の肉体であってソクラテスその人ではないといい、肉体を無視し、魂を重視した。

このようにソクラテス、ストイック派、ディオゲネスなどは肉体を軽視し、靈魂不滅のみを信じた埋葬不要論者であるが、これに対しピタゴラス派や靈魂輪廻信奉派、プラトン派は土葬を重視した。

人にとって宗教は論理で割り切れるものではないが、埋葬の方法も厳密にいうと論理的根拠がないかもしれないが、なんらかの象徴的役割りを果たしているようだ。薪に背を向けいやいや点火するのは、それを嫌がっている明白な証拠である。死者の骨をワインやミルクで洗うこと、母親が骨をリンネルに包み自分の胸——最初の養いの箇所——で乾かすこと、火を点ける前に希望の場所ないしは由来のものと場として天を望むこと——これらはいわれのない儀式ではない。

死者との別れに三度別れを唱える——「さらば、さらば、自然の命に我らしたがう」——のは大層厳かだし、キリスト教徒もまたこれを倣って、埋葬時に土を三度投げ入れる。墓に巻き散らすのに、ローマ人は薔薇を、ギリシャ人は（常世の花である）アマランスとツルニチソウを好んだこと、火葬の薪は香りのよい木——杉、モミ、カラマツ、常緑樹を用いたこと——これらは再生の希望を表している。一方キリスト教徒は棺を月桂樹（*bay*）で覆うが、それはこの木が死んでいるように見えても根から復活し、ひからびて水気のなくなった葉も再び緑を取り戻すから、よりエレガントなエンブレムである。これと同じであるのがはりえに羊歯（*furze*）である。——（は

りえに羊歯が復活のシンボルであるとすれば、ハーディーの小説『帰郷』(The Return of the Native)の主人公クリム(Clym)が最後になるはりえに羊歯刈り(furze-cutter)は彼の復活の象徴ではないか——筆者註)イチイの木を墓地に植えるのは古代の儀式に由来するのか、あるいはその常緑樹の性質から復活の象徴としてなのかは、推量の域を出ない。(この節の前後を三四郎が読んでいる——筆者註)

葬儀に音楽を用いるのは、異なった音色により死者への友の愛情を高めたり静めたりするためであろうが、その象徴的な意味は、天上に帰った魂の本来の調和を示すものであった——人間の魂は蟹座(Cancer)より降りて、山羊座(Capricornus)より天に戻るとされた。

歯のはえない子供は柔らかすぎて骨が残らないので火葬にしない。火葬の後には数日家で火を使わない。大泣きをして死者の安寧を邪魔しない。

墓の中の死者の体位について。大抵は一番深い眠りにふさわしい仰向きに姿勢をとったが、これは誕生時や胎内の体位とは逆のものである。ディオゲネスは奇妙にもうつ向きの姿勢を望んだし、キリスト教徒の中には仰向きもうつ向きも好まず、休息の姿勢を拒んで立ったまゝを望んだものもある。

死者が足を前にこの世から出ていくのは誕生時の逆で意味があるし、この世を振り向かないで別れを告げる。マホメット教徒の場合は逆で、楽しい人生に再び回帰できると信じているので、頭を先にして家を見ながら運ばれていく。

死者の目を閉じるのは、目が最初に死ぬ、ないしは死の効果が最初に現われるからである。死んだかどうかを確かめるには大声で死者を呼ばずに、羽とかコップとかをあててみたり、あるいはものが目に映るかどうかを見るとよい。死んだ目はものを映さない。この方法は死んだ直後の身体には、厳密には、当てはまらないかもしれぬが、4、5日経ったものには有効である。

死者の最後の息を吸い取ってやるというのは、医学的になんら根拠のある

ものではなく、魂がそうすることで出て行くといういい加減な考えや、人の靈魂はそれを自分のものになりたいと願う別の者の身体に移動するという、ピタゴラスに由来する、馬鹿げた愛情に基づくものでしかない。

火葬の薪に油をかけるのは、その意図が火付きをよくするというのである。限り許容できるが、早く焼けると吉だからとか、そうなるよう風の神に犠牲を捧げるなんてことは、くだらぬ迷信である。

死者の行列についておどけたり死者の物真似をしたりするのは、葬儀の厳かさを壊すものであるから不要である。また三途の川の渡し賃もくだらぬ習慣だ。ただし大きな瓶にコインを入れるという古いしきたりや高貴な建物の基礎にメダルを埋めるという現代の行ないは、行為、人、年代などに関し、歴史上の発見の手掛かりとなるので後世の者には結構なやり方だろう。

火葬や土葬を拒絶された者は、天からの火で焼かれたもの、反逆者、自殺者、罪人など、地獄行きの連中である。

わけの分からぬ習慣や出来事もある。8～10人の男の死体に、よく燃えるというので女1人を混ぜて焼くというものや、ヘロドトスのいうペリアンデル（Periander）の妻メリッサ（Melissa）の不平——「火葬にしてくれなんだから、あたしゃ地獄で寒くってしょうがないよ！」（地獄じゃ寒さも責めのうちじゃ、ばかたれ——筆者註）——これをどう思うか？

他にもある。なぜ男性の幽霊に先んじて女の幽霊がユリシーズにあらわれるのか？なぜタイレジアスの靈魂は男性なのか？（タイレジアスはこの世では盲目だったが、地獄では誰よりもよく見える）。なぜ吊いの食卓が卵と豆と野生のセロリとレタスなのか？ほとけはアスフォデル（極楽に咲く不死の花）を食べられるのではないか？（ルキアヌスの『黄泉路の旅』*Downward Journey* 参照）。避けられない人の死には犠牲も贖罪も役に立たないのに、なぜ人はモルタ（Morta）の神（運命の女神でギリシャ人はアトロポスと呼んだ盲目の老婆）を飾って、耳のない紳士を役にもたたぬのに拜んだのか？ これらは皆問題である。

つづいては文学作品の死者たちのこと——ホメロス、ウェルギリウス、ダンテなどの描く黄泉の国の亡霊たちの相違と特徴について。ホメロスの古典的な地獄では死者はみんな生きてはいるが、うまく喋れたり、予言したり、生者を知ることはできず、命のもとである血を飲むだけである。だからマーキュリーに案内されたペネロープの愛人たちはコウモリのように鳴くだけであり、ヘラクレスを追かけた女たちは群れをなす鳥のような音しかたてられない。

死者は過去、未来は知っているが、現在のことは知らない。アガ멤ノン はユリシーズに何が起こるのかは予言するが、自分の息子がどうなっているのかは分からない。ホメロスの死者は剣を恐れるが、ウェルギリウスのシビリャ (Sibylla) はアイネーアース (Aeneas) にいう、「死者の薄い衣には剣は無用」と。死者は肉体と共に悪意をも捨て去るもので、シーザーとポンペイはラテンの地獄で和解するが、ホメロスのアイアースはユリシーズとの会見を許せない。ウェルギリウスの死者の中でデイフォブス (Deiphobus) は滅茶苦茶に切り刻まれているが、ホメロスの傷ついた死者たちはみんな完璧な亡霊になっている。

ルーキアーノスによると、三途の川の渡し守のカロンは死者の中にいる己の地位に十分満足しているのであるから、死を軽蔑するアキレスが、死者の王になるくらいなら農夫のしもべになったほうがましといったのは、はたして立派ないいぐさであったかどうか疑問が残る。天国と黄泉の両方にいる矛盾した死者たちも疑問である。ヘラクレスの魂は地獄と天国いずれにもいる。シーザーの魂はある星にいるのに (ホラティウスの『オディッセイ』参照)、アイネーアースが地獄で彼を見る (『アイネーイス』参照)。もっとも肉体、魂、そして両方のイメージ=影という古代の分類によると、亡霊 (ghosts) とは天国に迎えられた魂の影に過ぎない。死後の人間存在の具体的なこと (何処にいて、どうなるのかといったこと) については、昔も今もはっきりしたことは分からない状態にあるというのが真実である。死

後の世界について語るはプラトンの洞窟の中で語るをいまだでないが、これは子宮の中で赤ん坊が外の世界＝この世を語るに等しい。

ダンテの壮大地獄の思想家たちの中には、プラトンもソクラテスも、そして死後の世界も地獄の王プルートも一顧だにしない享楽主義者エピクロスもいるが、なぜかピタゴラスは言及されていないし、小カトーは浄罪界にいる。

マキアヴェッリはキリスト教が人を臆病にして、「忍耐」と「謙遜」というキリスト教の軽蔑された美德のため、人は自殺する勇氣もなくなってしまうと非難しているが、これはとんでもない間違いで、死を軽蔑したり、死後のことをなにも考えない者でも、キリスト教にいう死後の魂の安寧を知ったなら、この世よりもあの世の方がよいと思うであろう。確かに不快な人生のただ中で、あるいは老い先の短さと老衰を思い、生きるに値しないと悟って自殺した（キリスト教以前の）古代の者の勇敢なることを過小評価しようというのではない。しかし、人間は肉体的存在であるから死なねばならぬとして、死を軽蔑し命を縮めることは、死後の幸せを促進するものではない。肉体を持って地上で神の栄光を求め戦って生きた者こそ、死後天上での幸せを得られよう。

確かにエピクロスの様に靈魂の不死を否定した者がダンテの地獄の深みにはいる。ただしキリスト教徒よりもっとよりよい（徳の高い）人生を送った人が異端者の中にもいないわけではない（残念ながら）。

我らは有難いことに死後の魂の不死について心まよわす必要のない時代に生きているが、かつては死後のことが分からぬゆえ、高貴なる魂でさえ迷いながら死に至ったものだ。ソクラテスは迷える心を魂の不死を希望することで、一服の毒薬に立ち向かったのだし、また自らに一撃を加える前に、小カトー（ストア哲学者）はプラトンの靈魂不滅説を読むことで自殺のためらいがちな手を勇気づけたのだ。

人に対してお前はもう寿命だ、もうこれより先の世界はなく、いまその終

焉に向って進んでいるのだということは、メランコリーが人に投げ付ける石の中で最も重たい石であろう。この世の生を終えなければ次の状態（来世）を自然に期待したり望んだりすることは自然（寿命）という意味の取り違えであろう。ところが人は肉体だけの存在ではないがゆえに、現世だけで満足しない魂の持ち主であるがゆえに、死後の世界の靈魂の不滅を願うのである。

CHAP. V

確かに人間は生きていくという習慣に引きづられて、年がたって自然と死に同化しうる存在にはなかなかない。年のいかにいうちに逆境や悲しみのため老け込んでしまうことが多い。だが最も退屈な連中は現在の己の生を否定し、先の世（死後の生）のみを望むようなものたちである。

サイレンがどのような歌を歌い、アキレスが女たちの中に隠れたときどのような名前を使ったかは、謎であるが、まったく推測できないわけではない。またこれら骨壺の本人がいつ死者の仲間入りをしたのかも特定しにくい問題ではある。だが、その骨が誰のものかという身元ということになると皆目分からなくなる。

つまり骨だけ残して名を残さないのは片手落ちのアイデンティティー保存方法でしかないのであって、それは愚かにも人間は忘却の動物であるということを見殺した虚栄のなせる技でしかない。それでも古代人は骨をも名をも残し得たが、現在我らが後世に名も骨も残そうとしても、これまでの様にうまくはいかない。なぜというに、この世の残りは、エリアの予言にいうところによると、わずかに400～500年ということになっているからである。（この世は B. C. 4000に創造され6000年存続すると思われる。すると今1658年であるから2000年まであとわずかということになる——筆者註）

したがって、いまや我々の思い出となるものを後世に残そうとするのは、まさに時代遅れの虚栄でしかない。ヤヌスの一方の顔（過去）はもう片方の

顔（未来）と釣り合っていないというわけだ。この世の永続を願うのは、それが終焉し神の国の到来を祈ることとは相反することである。したがって、神の摂理を信じる我々としては、もうこの世が限られた時間しかない以上、当然次の世のことを考えざるをえなくなる。つまり神の永遠不滅の世界のことである。

円に横棒の一、つまり、θはギリシャ語の死を意味するものであるが、この円に横棒はすべての人間に終わりを与えるもので、「人は時の阿片に対する解毒剤を持たぬ」(There is no antidote against the opium of time)。たかだか次の世代に記憶されることを望むだけで、墓や墓碑銘も永遠のものではない。そして忘却の淵に沈んでしまう運命なのだ。(ブラウンはこの世の終焉の時と人間の滅びという運命へのキリスト教による諦観を述べる——筆者註)

いったい誰がカルダーノ(Cardan)のように、名前だけ後世に覚えてもらえれば功績や高貴な行いなどなくとも満足というような人がいるだろうか。我らが故人の記憶の慰めとなるものこそ、まさにそうした功績や高貴な行ないではないか。「値打ちある行ないをしたるもなお無名であるは、不名誉な歴史に優れり。マタイ伝にいうカナーンの女は名を残せしヘロディアスよりも名無くしてより幸せに暮らせり。また(キリストを処刑にせし)ピラトより善良なる盗人の方になりたがらぬ者はありやなしや」(To be nemeless in worthy deeds exceeds an infamous history: the Canaanitishwoman lives more happily without a name than Herodias with one. And who had not rather have been the good thief than Pilate?).(このあたり『三四郎』の広田先生を思わせる——筆者註)

だが忘却という人間の不公平な行為は善行を忘れ、悪行を記憶し、また記憶すべき人を忘れ去らせたりする——だから人間のする善行も空しい。

(この箇所を漱石は『三四郎』に引用している——「寂寞の罌粟花を散らす

やしきりなり。人の記念に対しては、永劫に価するといなとを問うことなし」。これをもう少し分かりやすく訳すとこのようになる——「不公平な忘却はあたりかまわずその芥子の花を撒き散らし、当然後の世にまで残るべき功績にも無関心に故人を扱うものだ」(…the iniquity of oblivion blindly scattereth her poppy, and deals with the memory of men without distinction to merit of perpetuity.)

この一節の続きを訳しておくとな次のようになる——「ピラミッドを造りしも、その名を忘れられた人を憐れと思わぬ人はあるまい。ダイアナの寝殿を焼きしヘロストラートスは人の記憶にのぼれるに、それを建立せし人の名は失せり。時はハドリアヌス帝の馬ボリステネス(Borysthenes)のエピタフを生き残らせしが、当の本人を消しさりぬ。我らが善行もて幸福を競い合うはむなし、そは悪行も劣らず寿命を長らえるものなればなり。テルシーテース(『イリアッド』に出てくる最も醜く、口汚く、復讐心の強い男)がアガメムノンに劣らず生き延びるさまなればなり。最良の者が残りにて知らるるにや、時の帳簿に記録されし者より優れたる者の忘れらるるにや、誰か知らん。．．．」(Who can but pity the founder of the pyramids? Herostratus lives, that burnt the temple of Diana: he is almost lost that built it. Time hath spared the epitaph of Adrian's horse, confounded that of himself. In vain we compute our felicities by the advantage of our good names, since bad have equal durations, and Thersites is like to live as long as Agamemnon. Who knows whether the best of men be known, or whether there be not more remarkable persons forgot than any that stand remembered in the known account of time?) (特に最後の一文などは広田先生に当てはまるのではないかと——筆者註)

『忘却を雇わんとするは不可なり』(Oblivion is not to be hired...)。我らが生の大半は忘却の淵に沈められ、死者の数が生者を上回り、時は確実に

(予言の)終焉に向かって年老いて行き、我らが暗闇の中に没するのも真近かなれば、「未来永劫を望むは、愚かなる夢のまた夢なり」(....diuturnity is a dream and folly of expectation.)。

我らが過ぎ去りしことを忘れ未来の悪をも気づかずにいられるのは、有難い神の配慮であるが、人は古来よりこの忘却から逃れんとして、いろんなことを考え手段としてきた。古代人の多くが存在の永続を靈魂輪廻(transformation of their souls)ということに託したのもその一例である。また死んで無に帰するよりは宇宙靈魂(the public soul of all things / their unknown and divine original)の一部に帰することを願う者もあった。これらに不満なエジプト人は、魂の復活(再生)に肉体を呼応させんと工夫をこらした(防腐処置をしたミイラのこと——筆者註)。しかしカンピーズや時が手を付けずにいたもの(ハムの息子ミズライム(Mizraim)やファラオのミイラなど)を、人間の欲望が薬代わりに使って滅ぼしているではないか。聖書にいうように「すべて空しく、風と愚を養うのみ」(...all was vanity, feeding the wind, and folly...)。

忘却より逃れんとすることはすべて空しいことだし、不死を願うもまた空しい。それは地上にても天空にても同じことだ。地上での不滅はかなわぬなら天上で星になって不滅になろうとしたが、それも無駄なことだ——天上でも星々の間で変化が生じ、ニムロデ(Nimrod、ノアの曾孫で狩りの名人——ギリシャ神話)はオーリーオーン(Orion)に、そしてオシリス(Osiris、冥界の王、弟セトに殺されたが妹で妻のイシスに救われ復活した——エジプト神話)は天狼星(Dog-star)に飲み込まれ姿を消したではないか。天上とて地上と同じこと、本体は存続しうるが、部分の変貌していくものなのだ。

厳密にいうと、神が約束した靈魂の不滅以外に不滅なものは何もないのだ。これに比すれば、地上の栄光や後世の記憶に残るのを願うは愚かなことだ。

「生というのは純なる炎にして、我らは身の内にある見えざる太陽によりて生くる者なり。ゆえに生にはわずかなる火にて足れり」(Life is a pure flame, and we live by an invisible sun within us. A small fire sufficeth for life...)。それを人は死後大きな火を焚いても小さすぎると思って、貴重な薪を空しくも望み、サルダナパール王のように焼かれることを欲した。だが葬儀の立法により巨大なる火葬は愚かだと悟り、土を土に還えす火は簡素なものにし、貧しき者も薪、ピッチ、嘆きの人、そして骨壺を購えるようにしたのだ。

ゴルディアヌス(Gordianus)の墓碑銘は5つの言語で書かれたが、消し去られた。このように地上の墓は儚ないが、それにひきかえモーセ(神が埋葬した唯一の死体)や、墓も埋葬もないイーノックとエリア(二人とも生きながらに神に天国へ招還された)は、人の記憶に永遠に残っているではないか。後者の二人は、厳密にいうとまだ死のこちら側にいて、最後の審判時に証人となる役割が残されているのだ。

死後人に知られぬ墓を造って後の世の者の攻撃から身を守ろうとして果たせなかったもの(川底に骨を隠したゴート族の王アラリクス(Alaricus)やローマの将軍スッラ(Sulla)などもおれば、死んで幸せに死者の仲間に入った者もある。

ピラミッド、アーチ、オベリスクなどは人間の虚栄が生んだ壮大ではあるが、不完全な不滅追及物であるのに対し、キリスト教こそプライドを踏みつけ、野望の首を襲い、過たぬ永遠を謙虚に求めうる、最も壮大にして完全なる魂の永遠の保証である。

生きながらにして真にキリスト教による天上での天使の仲間入りまでのプロセス——死(annihilation)、エクスタシー(extasis)、魂の開放(exolution)、融解(liquefaction)、変容(transformation)、神の接吻(kiss of the Spouse)、神の賞味(gustation of God)、そして天使の仲間入り(ingression into the divine shadow)——が悟れる者は天のイメー

ジをすでに見事に予見しえた者である。「その者にとってはこの世の栄光はすでに終わり、大地はすでに灰になりたればなり」。

自らの永遠を託すべく人間が作り出したものは、古え人の期待を満たし楽園の一部となった。だがこれらのものはキリスト教の真の信仰による再生、復活に比べれば、無きに等しい。(漱石は『三四郎』の中でこの最後の一節を妙訳しているので、それを引いておく)。

朽ちざる墓に眠り、伝わる事に生き、知らるる名に残り、しからずば滄桑の変に任せて、後の世に存せんと思う事、昔より人の願いなり。この願いのかなえるとき、人は天国にあり。されども真なる信仰の教法よりみれば、この願いもこの満足も無きがごとくにはかなきものなり。生きるとは、再の我に帰るの意にして、再の我に帰るとは、願いにもあらず、望みにもあらず、気高き信者の見たるあからさまなる事実なれば、聖徒イノセントの墓地に横たわるは、なおエジプトの砂中にうずまるがごとし。常住の我が身を觀じ喜べば、六尺の狭きもアドリエナスの大廟と異なる所あらず。成るがままに成るとのみ覚悟せよ。

(To subsist in lasting monuments; to live in their productions; to exist in their names, and predicament of chimeras, was large satisfaction unto old expectations, and made one part of their Elysium. But all this is nothing in the metaphysics of true belief. To live is indeed is to be again ourselves, which being not only a hope but an evidence in noble believers, 'tis all one to lie in St. Innocent's Churchyard as in the sands of Egypt: ready to be anything, in the ecstasy of being ever, and as content with six foot as the moles of Adrianus.)

さて本書の締め括りにはローマの詩人ルカヌス (Lucanus, A. D. 39-65)

の *Pharsalia* からのラテン語の一句が挙げられている。

．．． 腐敗が屍を解体するや、薪の火がそうするやは
我らの関するところにあらず．．．

(...Tabesne cadavera solvat

An rogu8 haud refert....)